

## 第2部 生物多様性の劣化

### 第5章 自然・文化と生物多様性の歴史的変遷

#### 1 千葉県の自然環境

房総半島は、暖流の黒潮と寒流の親潮がぶつかり合い、陸域においても、南からの常緑広葉樹林と北からの落葉広葉樹林とが見られる。このように南北の動植物が会おう多様な生物相、3年以上におよぶ人々の生活かかわりは、里山・里海とよばれる豊かな二次的生態系をもたらした。

##### (1) 地形・地質・気候

今から十数万年前、関東平野のほぼ全域は古東京湾と呼ばれる浅い海であった。その南部には現在の房総丘陵が三浦半島とつながり、島になった時期もあった。古東京湾の時代に海底で堆積した土砂は現在の関東平野全体の基盤を成し、その後の陸化や火山灰（関東ローム層）の堆積等によって現在の房総半島が形成された。

北総域は、北に利根川、東に九十九里浜の太平洋、西には江戸川及び東京湾内湾の各水域が外周を縁取り、印旛沼と手賀沼の内水面も形成された。陸域は標高 20-80mの洪積台地と沖積低地から成り、この台地に樹枝状に入り込む谷津地形は特徴的である。北総域の地盤のほとんどは海成の砂層と粘土層とが交互に重なり、そのため多量の地下水が含まれ、谷津には湧き水も多い。北総域の平均気温は 14~15℃、年降水量は 1300~1600mm である。

一方の南総域は、東が太平洋、西は東京湾外湾に面し、一部で火成岩がみられるもののほとんどは堆積岩からなる丘陵地形が広がる。房総丘陵の標高は 200-400mで、その最高は嶺岡山系愛宕山の 408mである。しかし、丘陵を形成する比較的柔らかな基盤は急峻で谷深い山岳的な地形をつくった。南総域の平均気温は南部で 15.5℃を超える一方、内陸では 13.5℃を下回る。年降水量は 1500mm 以上で清澄山系では 2200mm に達する。

##### (2) 海の生物

フィリピン沖に端を発する黒潮は、冬でも水温 12℃を超える暖流で、カツオやマグロなど多くの南の海の幸をもたらす。熱帯起源の黒潮は館山の沿岸に、キクメイシやエダミドリサンゴなど世界の北限の造礁サンゴをもたらす。クマノミやチョウチョウオ等の熱帯魚もみられる。

一方、北のベーリング海から北日本の沿岸を南下する親潮は、銚子から九十九里沖に達し、秋から冬にはマイワシやサンマのほかサケの遡上もみられる。そしてこのサケはときに南房総のサンゴの海を廻り東京湾でも記録される。外房の沖には浅い岩礁地形の磯根があり、タイやイセエビ、アワビやサザエといった多種多様な魚介類とともにヒジキやテングサ、ワカメ等の海藻も多い。そして、これら動植物の食物網の最上位に海生哺乳類のスナメリが定着し繁殖している。

東京湾内湾は干潟も広がる浅い海でアサリやアオヤギ等の貝類のほかノリ養殖も盛んである。江戸川放水路河口の泥質干潟には北限のトビハゼが生息している。

##### (3) 陸の植物

房総半島の植生は中国南部に端を発する暖温帯性の常緑広葉樹林帯（照葉樹林帯）の北限域

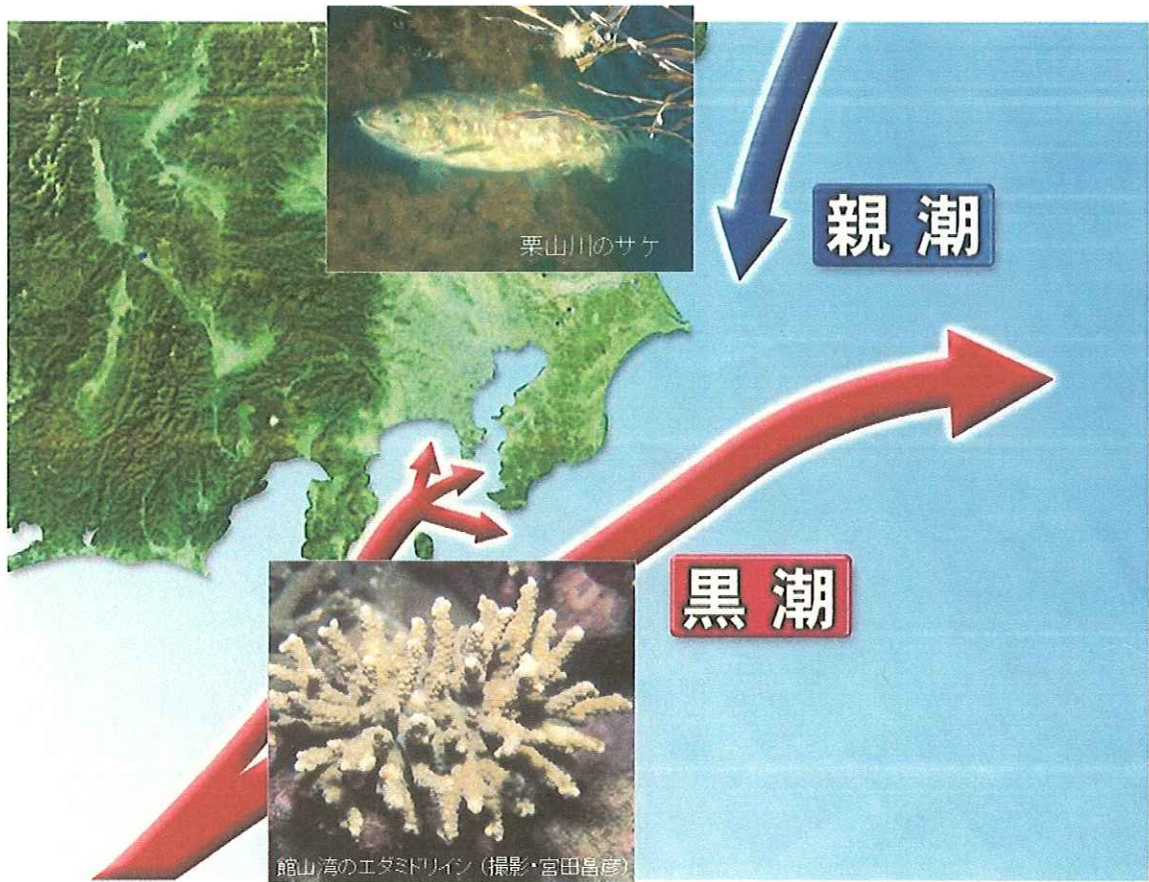


図 親潮サケと黒潮サンゴ

にあたる。代表する樹種としてはタブノキやスダジイ、アカガシ等の高木のほか、ヤブツバキやカクレミノといった中低木、またホソバカナワラビやイノデ等の草本植物があげられる。県木のイヌマキも千葉県を北限とする常緑樹の一種であり、栽培され名産になっているビワも中国南部から南日本に自生する常緑広葉樹である。南房総の海岸に亜熱帯に分布の中心をもつハマオモトの生育がみられる。

一方、千葉県の北部から丘陵地帯にかけては、冷温帯性のコブシやイヌシデ、コナラ、ケヤキ、フサザクラといった落葉広葉樹林（夏緑樹林帯）が多い。千葉県の名産のナシは、北総域で多く栽培される果樹であるが、その原種は落葉広葉樹のヤマナシと言われる。

房総丘陵の山頂や尾根付近にはヒメコマツやヒカゲツツジ、スズタケといった他では主に標高 1000m以上の山地帯に生育する植物がみられる。これは寒冷期に低地に生育していた種がその後の温暖化で高所に移動し、高い山のない房総半島ではかろうじて丘陵の山頂付近に残存する、いわば「寸づまり現象」と解釈されている。このような残存的な植物は低地にもあり、沼地に生育するミツガシワ、湿原のトキソウやサギソウ、また九十九里海岸のハマナスのほか雑木林の林床の春植物、カタクリやイチリンソウなどもその分布の中心は山地や房総半島以北である。

#### （4）陸の動物

地史的に本州との連続、分断が繰り返されてきた南総域の丘陵地帯にはその歴史を物語る動物相が多くみられる。昆虫のボウソウヤマキマダラヒカゲ、アワカズサオサムシ、シロバネカワトンボ等の生息は三浦半島とのつながり及びその後の島化、分断化の影響と推定され、シカやニホンザル、またヤマアカガエルやオオトラカミキリ等は氷期の本州との強い結びつきを物語る。

昆虫のシャープゲンゴロウモドキやオオミズクサハムシ、またナカムラオニグモのように北日本との関係の深い種の生息がある一方、暖温帯の常緑カシ類を食草とするルーミスジミヤ、南方系の種でかつては房総での生息しなかつたナガサキアゲハやクロコノマチョウが最近確認され、これについては地球温暖化の影響も推定される。さらに近年、アカゲザルやシカ的一种キョンといった外来種も多く生息するようになっている。かつては絶滅も心配されたシカやニホンザル、そして房総半島からいったんは絶滅したがその後人為移入されたイノシシも増え、今では農作物等に大きな被害を及ぼす状況になっている。

北総域に多い谷津田（谷津低地の水田）とその周辺には、希少な魚類のミヤコタナゴやスナヤツメ、ホトケドジョウの他、人々の生活とも結びついた多様な動物相がみられる。谷津田周辺には猛禽類のサシバやオオタカも多く、沼や干潟の水辺には多様な野鳥が生息している。印旛沼のサンカノゴイをはじめ、最近ではマガンやコウノトリの飛来・越冬も確認されている。日本では絶滅してしまったトキであるが、千葉では昭和 28 年まで飛来し日本の太平洋側での最後の記録となっている。

近年、東京湾岸を中心に都市化が著しく、自然環境の変貌は外来生物や、移入生物を増加させており、カミツキガメやブラックバス、ブルーギル、ハクビシン、アライグマの定着・増加は本来の生物相および生態系を大きく変質させつつある。

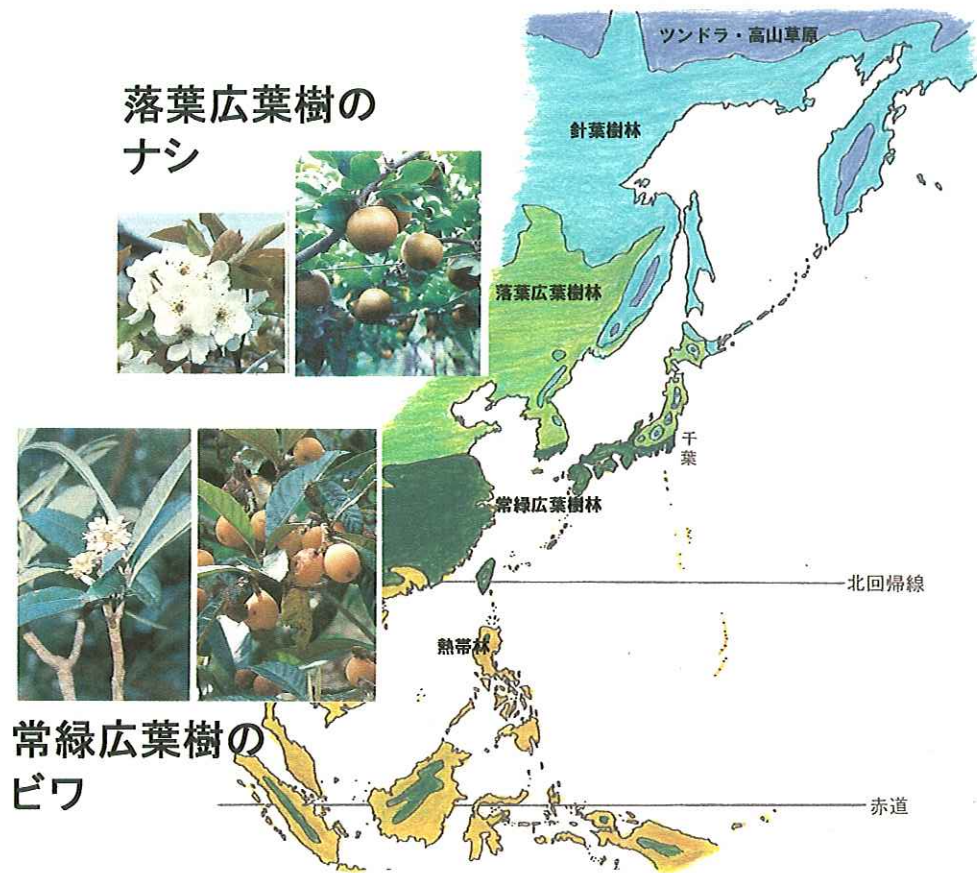


図 東アジアの植生と房総にみられるバラ科樹種の落葉のナシと常緑のビワ